

第7回

第2章 人間としての自覚

ソクラテス
～哲学の出発点～

今回学ぶこと

アテネの人ソクラテスは、「ソクラテスより知恵のあるものはいない」という神の言葉の真意を確かめるために、人々と問答を繰り返した。そして、自分以外の人々は徳について知らないのに知っていると思い込んでいることを見だし、「無知の知」の大切さを説いた。そのことで恨まれた彼は死刑となったが、生涯を通じて正しさを貫いた。



講師
和田倫明

今回のキーワード！

ソクラテス／アテネの直接民主制
ソフィスト／弁論術／問答法／無知の知

ソクラテスの問答法

古代ギリシャでもっとも繁栄したポリス（都市国家）であるアテネは、直接民主制を行っており、議会や裁判で優れた弁論をすることは重要で、ソフィストたちが弁論術を発展させたが、反面、詭弁（こじつけの議論）がさかんになり政治が混乱することもあった。

そんな中で活動したソクラテスは、自分には知恵があるとは思われないのに「ソクラテスより知恵のあるものはいない」という神託がおりたことを受けて、自分よりも知恵があると思われる人々に対して問答を繰り返した。

無知の知とはどういうことか

問答を繰り返すことでソクラテスは、「人間にとって本当に大切なこと」つまり「徳」につ

いては、誰一人として知っていないことに気づいた。しかし、自分には知恵があると思っている人たちは、実際には知らないのに、知っていると思い込んでいた。

ソクラテスは、自分には知恵がないと気づいている。しかし、他の人は気づいていない。この、無知に気づいている（「無知の知」を持つ）分だけ、ソクラテスは他の人々より知恵があることになる。

ソクラテスは、神が人間に、実際には知恵がないのに、あるという思い上がりをいさめようとしたのだと考えた。

ソクラテスの死と正義

ソクラテスは、知恵があると思い込んでいる人々の無知を暴いていったために、恨みを買って裁判にかけられることとなった。彼は裁判でも自分の正当性を堂々と主張し、不正を働いていない自分にふさわしいのは刑罰ではなく国立迎賓館でもてなすことであるとまで主張した。その結果、一般市民の裁判官の多数決で、死刑判決が下された。

監獄にあっても、脱出して海外で過ごすように勧める誘いを、不当な判決を受けたからといって脱獄が不正であることにはかわりはないと断って、死刑執行を受け入れた。

ソクラテスの考え方には賛否両論があるだろうが、ここに民主主義の難しさがあることは確かである。

Wadaコラム

ソクラテスと奥さん

ソクラテスは問答ばかりしていて、奥さんが文句を言っても耳を貸さない。怒った奥さんが水をかけたけれども、ソクラテスは動じないので、周りの人が驚くと、「雷が鳴った後には、雨が降るものさ」と言ったとか。ただしこうしたエピソードは、だいぶ後の時代につくられたもので、実際のソクラテスの奥さんについてはよくわかっていない。